

胆道ディスキネジーの一例

臨床 § 症 例

峯 尚志



はじめに

20年来の発作性の右季肋部痛・右背部痛に悩む41歳女性の胆道ディスキネジーの一例である。

発作は食べ過ぎやストレスのほか、黄体期（高温期）に現れやすく、過食・抑うつ・蓄水など心身両面の変化を伴う。

肝気鬱結を基本病態とし、肝脾不和・蓄水・気鬱化熱と証の重心を移しながら、約1年にわたり加減を重ねた。

最終的に清熱解鬱湯系で安定が得られた経過と、清熱解鬱湯の古典的背景・「心身一如」の視点を述べる。



症例 41歳 女性。身長153cm、体重49kg。

主訴

発作的におこる右季肋部痛、右背部痛

診断

胆道ディスキネジー

現病歴

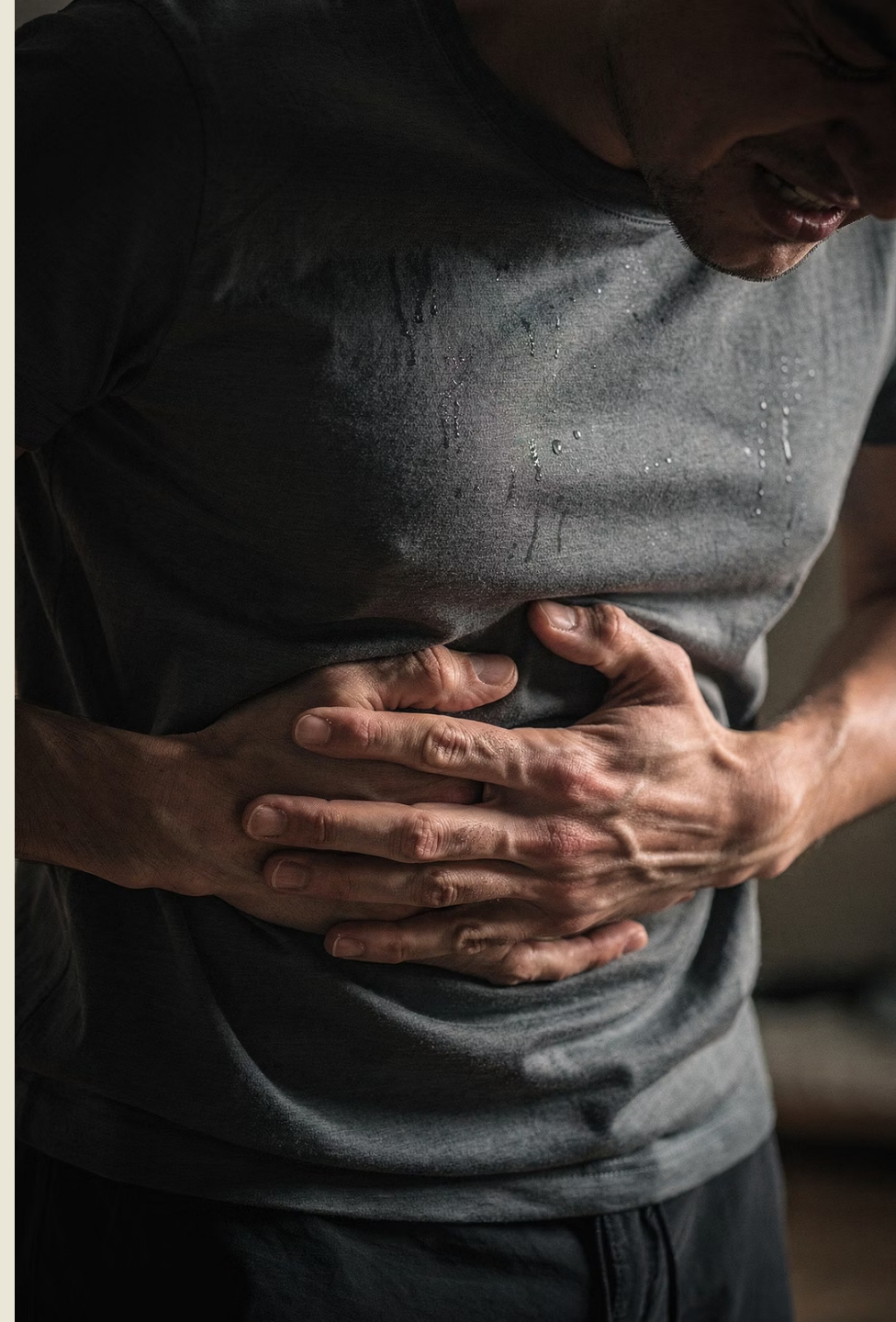
20年来、上記の症状に悩んでいる。痛みは、食べ過ぎたとき、ストレス状態が続いたとき、発作的にやってくる。頻度は年に7、8回。多いときで月に一回の発作がある。前回はひと月前、腹痛で近くの病院を受診し、腸閉塞状態といわれ、数日入院した。

所見・生理

脉、沈、細。舌は暗い淡紅色。齒痕あり。白苔少量認める。腹部は腹力は中等度。上腹部がやや膨満し、右季肋部（期門穴）の圧痛著明。左の臍傍（天枢）や臍下部（大巨）を押すと右季肋部に痛みが放散する。生理は28日型で規則的。月経血は鮮紅色で固まりは少量、帯下は少量で排卵前に透明で、さらさら。生理前に気分が不安定になり、食欲が亢進し、腹痛の発作がある。生理前の乳房の腫脹はない。

痛みの質

発作は突然起こることもあり、また胃腸の不調及び背部痛をともなう腹部鈍痛が前兆になったり、あるいは発作後にだらだらと続くこともある。鈍痛の場合は、身体の中に大きなおできがあり、身体の動きによってそれが揺らされるような鈍重な痛みが特徴である。同時に右肩甲骨から胆嚢付近にかけての矢を刺したような痛みがあり、マッサージしてもシップを貼っても軽減しない。胃は食べたり飲んだりすると膨らんだ風船に水が入ったようになり、腸は動かず、便秘気味になる。発作ではおできそれ自身がドキドキと脈を打つような痛みが一週間くらい続く。3～4日でピークは越えるが、それまでは歩くのも、寝返りを打つのも、横たわることも、息をすることも辛く、ほんとうにかぜが吹いても痛いという状況である。痛みの程度は一日のなかでも変動があり、朝は比較的良好、夕方にかけて鈍痛、夜になって疝痛、夜半を過ぎると耐え難い痛みとなる。救急病院に駆け込むのはたいてい夜中の一時過ぎである。



症状のヒント

- 痛みは、生理前（高温期）にやってくることが多い。
- 排卵時に痛みが来る。
- 生理前になると、食欲が亢進し、過食の傾向になる。
- 調子のよいときは過食の傾向はない。
- 生理前にチョコレートを食べてしまう。
- 調子が悪いときは、プールで泳ぐと尿が出る。
- 発作が起きると物理的な痛みはつらいのだが、一方でほっとするような気持ちができるのも事実である。（洞察、誘導尋問の可能性もあり）

症状の整理

周期性

高温期に起こる体調の変化。

消化管異常

蓄水傾向。便秘傾向。消化管の運動異常（イレウス傾向）

心理面

心理面の影響。がんばり屋、抑うつ傾向。

黄体期（高温期）の体調変化

黄体期になると、眠気・だるさ・頭重感、いろいろ、便秘やむくみ、腹部膨満、甘いものへの欲求、乳房の張りなどが現れる。

本症例でも、月経前に食欲が亢進して過食に傾き、味覚が変化し、代謝が低下する。

こうした高温期の心身の変化が、発作の増悪と深く関わっていた。



病態の捉え方と治療方針

症状の軸は三つ。①黄体期（高温期）に増悪する周期性、②蓄水・便秘・イレウス傾向という消化管運動の異常、③がんばり屋で抑うつ的な心理的背景。

これらは肝気鬱結を中核に、肝脾不和・水湿の停滞・気鬱化熱として一連にとらえられる。

治療は疏肝理気を基本に、和胃・利水・通腑・清熱をその時々で加減する方針とした。以下、約1年の経過を追う。

経過

X年11月～12月初旬

X年11月12日に腸閉塞状態といわれ、数日入院。痛みのピークは夜中。ここ一年胆嚢炎、膵炎を併発したことがあり、重症化しているのではないかと心配。肝気鬱結による肝脾不和が基本的な病態と考え、加味逍遙散エキス合安中散エキスで治療開始。身体がむくむと訴えるため、甘草を含まない茵陳蒿湯エキス7.5 g分3に変方。右季肋部の抵抗は軽減する。茯苓飲合半夏厚朴湯7.5 gに通導散2.5 gを兼用。

年末

年末は大柴胡湯去大黄9.0 gに桃核承気湯エキス7.5 gを併用する。

X+1年1月～2月

1月：腸の訴え

一月に入り、「腸が動かない。呼吸をしても、少し動くだけでもお腹が破裂しそう」と訴える。

処方と経過

大建中湯15g 合桂枝加芍薬湯7.5g を処方、このときも生理前で、この処方で3割改善、体重は3kg上昇。生理をむかえて5割改善した。

腸のチャポチャポ

「胃ではなく腸がチャポチャポする」と訴える。

四逆散加減

四逆散加減（柴胡6、芍薬6、甘草2、枳実6、生姜1.5、香附子3、陳皮3、蒼朮4、茯苓4、山梔子1.5、山楂子3、大黄1.5、芒硝1）を処方する。むくみがとれたと報告する。

3月～4月

3月：理気剤中心の処方

理気剤を中心とした処方「丹参3、川楝子3、川芎3、芍薬3、陳皮3、紅花1、菊花2、釣藤鈎4、白朮4、茯苓4、莪朮1.5」とする。

4月：変性心気飲

変性心気飲（茯苓6、半夏6、桂皮3、木通3、檳榔子2.5、紫蘇子3、枳実2、桑白皮2、甘草1、土別甲2、呉茱萸2）「海の底から水面に向かって上がってゆく感じ。」



心象風景 小さい頃の思い出

「2歳くらいのとき、三世代同居の大家族で、食事をしている風景。祖父母、父の兄弟、母、私、店の人2人。大人の中に小さい自分がある。母の悲しげな顔。お母さんのことがいつも心配だった。大家族の中のかわいい〇〇ちゃん。」

5月～6月

清熱解鬱湯（万病回春）

山梔子 3、蒼朮 4、川芎 2、香附子 3、陳皮 3、黃連 1、甘草 1、枳実 1、乾姜 0.5、生姜 0.5、茯苓 4
（のちに茯苓 4、人參 2 追加）

8週間の経過観察

この処方で8週間経過観察できた。

投与開始時

投与開始時は1月以来の痛みで、微熱が続き、身体が痒い、嘔吐することもあった。

投与4週目

投与4週目には「朝の目覚めがとてもよい。どうどうめぐりは続くが、楽しいピクニックの夢を見るようになった。」

7月～10月

7月～8月

7月は藿香正気散、8月は清暑益気湯の加減で元気に過ごせた。

9月

9月に入り、抑肝散加陳皮半夏を処方。

10月：清熱解鬱湯一週間処方後

10月に入って痛みが少しずつ出てきたので

清熱解鬱湯一週間処方後、

烏苓通気湯『万病回春』（当帰3、茯苓3、白朮3、烏薬3、山楂子2.5、香附子2.5、延胡索9、芍薬2、橘皮2、枳榔2、沢瀉1.5、生姜1、木香1、甘草1）加猪苓3、蒼朮6g

を処方する。

11月

訴えと四逆散加味

口の苦味、舌苔がやや黄色、右季肋部がピクピクするという訴え

四逆散加味（柴胡5、芍薬15、枳実6、桃仁6、甘草3、川芎6、大黄2、薏苡仁8、茯苓6、蒼朮6、生姜1、5、陳皮3g）で便がでて胃の調子も少し楽。下腹が痛い。

現在の処方（咽から胃までムカムカ）

柴胡3、香附子4、芍薬8、蘇葉3、陳皮4、半夏5、枳実4、甘草1、乾姜2、人参2、白朮6、茯苓6、黄芩1、山梔子2、大黄1.5、芒硝0.5g

清熱解鬱湯へ——なぜこの処方が軸となったか

利水や通腑で一時的に軽快しても、黄体期の増悪と心理的緊張に伴う痛みが繰り返し現れた。

これは鬱が熱に転じた気鬱化熱の病態が、本症例の核にあることを示している。

五～六月の清熱解鬱湯（万病回春）で八週間の安定が得られ、十一月の烏苓通気湯・四逆散加味へと続く清熱・理気の流れが治療の軸となった。

そこで清熱解鬱湯がどのような病態に向けた処方であるのか、古典にさかのぼって確かめる。

清熱解鬱湯（万病回春）

心痛即胃脘痛

心痛稍や久しきものは胃中に鬱熱あるなり。

清熱解鬱湯

梔子炒黒二銭 枳殻焚炒 川芎
黄連炒 香附炒一銭 陳皮 乾
姜炒黒五分 蒼朮米浸七分 甘
草三分

服用法

右剤一剤生姜三片水煎し熱服す、服して後、飲食を半日戒め滓を取り再煎服す。

うつ症の代表処方

越鞠丸（丹谿心法）

香附子 3、蒼朮 3、川芎 3、神麴
3、山梔子 3

六鬱湯

香附子 3、蒼朮 4、神曲 2、山梔
子 2、連翹 2、陳皮 2、貝母 3、
枳殼 2、蘇梗 3、茯苓 3、甘草 1

解鬱調胃湯

香附子 3、蒼朮 4、山梔子 2、陳
皮 3、神麴 2、麦芽 3、川芎 2、
地黄 2、甘草 1、茯苓 4、桃仁 2

衆方規矩にみる清熱解鬱湯（曲直瀬道三著）

心腹痛

心痛はすなわち胃脘痛なり。多く気鬱し、日久しく鬱積するによりて熱となりて痛みをなすを治す。

処方

山梔子7.5、川芎3、枳殻3、蒼朮2、黄連2、陳皮1.5、炒干姜1.5、甘草1

服用法

右生姜を入れ煎じ服す。服した後飲食を戒むること半日、或は香附子をくわうるもまた可なり。

清熱解鬱湯

曲直瀬玄朔の医学指南篇の脾胃指南十二に、脾胃の働きは心の動きによって左右するもので、楽しい思いをもてば胃腸の働きが良くなり、不愉快な思いをすれば胃腸の働きが悪くなるばかりでなく、病気になるとある。

大塚敬節先生は「夏目漱石の病氣」という小論の中で、漱石が弟子にあてた手紙の一節「本日は虞美人草休業。肝癰が起ると妻君と下女の頭を正宗の名刀でズバリと斬ってやり度い。然し僕が切腹をしなければならないからまず我慢をする。そうすると胃が悪くなって便秘して不愉快でたまらない…」を紹介し、「漱石の胃病は肝癰をがまんするところにあったのだろう」と述べ、この清熱解鬱湯をあげている。香川修庵の「一本堂行余医言」を引用して、癰による便秘とストレス性胃痛には本方がよいと述べている。

おわりに

20年来の難治性胆道ディスキネジーを、肝気鬱結を軸とする一連の証の変化としてとらえ、疏肝理気を基本に和胃・利水・通腑・清熱を加減して約1年で安定に導いた一例である。

黄体期に増悪する周期性と抑うつ的な心理背景は、鬱が熱に転ずる気鬱化熱の病態を示唆し、清熱解鬱湯系の処方がよく奏功した。

胃腸の働きが情志に強く左右されることは、曲直瀬玄朔や大塚敬節がすでに説き、漱石の胃病をめぐる挿話にも通じる。

心と身体を分けずにとらえる「心身一如」の視点こそ、本症例の治療を支えた要であった。